

GRAZIE

“グラッツェ”

“グラッツェ”とはイタリア語で“ありがとう”の意味。陽気なラテン民族の言葉に倣って、素直に感謝の言葉を口にできる明るい場作りを、本学科は心がけています。

特集

単位読み替え留学
から戻りました!

「僕&私の体験、ホンネで語ります」

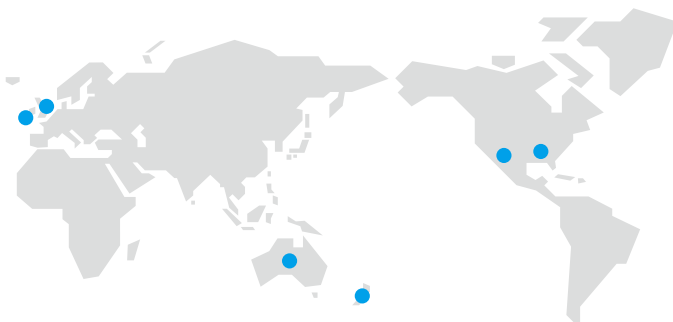
学科の第一期長期留学生たちが、ついに帰国しました。
留学という夢と、現地でぶつかる現実。

GRAZIE3号で紹介した現地からの近況報告とは一味違い、帰国してある程度時間が経過した分、みんな自分の留学をクールな目で見られるようになった様子。これから長期留学を予定している学生&保護者を対象にした留学説明会に協力してくれた学生らが、自分たちの経験から得た考えを存分に語ってくれました。

●2008年10月までに、単位読み替え留学を終えた学生数実績

カリフォルニア州立大学サクラメント【米国】	12名	計48名
ミシシッピ州立大学【米国】	4名	
ウェストミンスター大学【英国】	5名	
グロスターシャー大学【英国】	2名	
リムリック大学【アイルランド】	3名	
フリンダース大学【オーストラリア】	12名	
マッセイ大学【ニュージーランド】	10名	

●数ある英語圏の中で、それぞれの行き先を選んだ理由は?



【オーストラリア】

Aさん: 暖かいところが良かったので、それで選びました。あと初めて海外旅行に連れてってもらったのがオーストラリアだったから馴染みがあったのも理由。オーストラリア訛を心配しましたが、逆に彼らの訛がわかるようになったことで、相手によって英語を使い分けられるようになったので、最終的には良かった。

【イギリス】

Bくん: シェイクスピア文学にちょっと興味があり、作家たちがどういう環境で育ったのか見てみたかった。英国はちょっと堅苦しいイメージがありますが、実際のところはなんだろろうと行って試したくなった。

Cくん: 20年前に母がイギリスのロンドンに行っていた話を聞いていたので、小さな頃から憧れがあった。日本に入ってくる情報は、アメリカに比べてヨーロッパのものが少ない、だからこそ行ってみようと思った。イギリス英語を学んだために、中高で学んだアメリカ英語が逆にわからなくなりました(苦笑)。

Dさん: 動機は実は不純で、都会ならどこでも良かったんです。昔から中世のヨーロッパの建物とかが大好きだったので、せっかく行くな観光もしたいと思い、ロンドンにしました。

【アメリカ】

Eくん: 僕は野球が大好きだったので、同じ英語を学べるならやっぱりメジャーがあるところ、そこから考えたらアメリカになった。

【ニュージーランド】

Fくん: 僕は自然が好き、それだけの理由で選びました。



<http://www.meisei-u.ac.jp/dpt/International/>



【語学の授業】

(>_<。o)「毎日が挫折に次ぐ挫折。だって僕がアメリカで喋れたのは、最初、YesとNoだけ。英語が話せない分、スポーツなどをして言葉が要らない交流で仲良くなれるよう、頑張った」

(>_<。o)「日本の学生は、いかに楽をして単位を取ろうかと考えるのに、米国の学生はいかにいい成績を取ろうかと常に考えている。そういう環境の中に放り出されて、僕は自分の今までの勉学に対する姿勢を反省させられました」

(*^_^*)「私の英語は最初、中学生レベル。留学は大学の授業だけが勉強という感じではなく、24時間英語漬けの、生活自体がすべて勉強という感じでした」

(*^_^*)「一番下のクラスから始めたのですが、半年もいたら新しく来た生徒に英語でいろいろ教えてあげられるようになっていた」

【ステイ先】

(*^_^*)「ニュージーランドは牧場というイメージがありましたが、ホストファミリーの人たちと一緒に100匹くらいの羊を追いかけたり、木を植えたり、馬に乗ったり、そんな生活体験が最高の思い出になった」

(>_<)「英国のホームステイ先に外国人は一人だと思っていたら、私以外に7、8人。しかも年の近い男の子も同じ屋根の下に一緒だったので、違和感と不安に襲われた。私以外の人は英語が達者だったので、何を言われてもさっぱりわからず、最初の三週間泣きそうだった」

(>_<)「英国の僕のところも常に6人の留学生がいて(韓国、タイ、フランス、イタリアなど)、二週に一度は人が入れ替わっていた。日本人はシャイというイメージがあるらしく、食事の時に黙っていたら、『日本人はテレビや漫画がないと喋らないのか?』と言われたり、『刀はなんで持っていたのか?』などと質問された(笑)」



【体験に基づいた後輩とご両親へのアドバイス】

- 「留学は学生時代じゃないとできないので、した方がいい」
- 「親御さんも心配しすぎないようにして、自分の子どもさんの力を信じてあげてほしい」
- 「暗い奴だと思われないためにも、自分から前に出ていく努力が留学には必要です」
- 「日本のことをあらかじめ勉強していった方がいい」
- 「場所選びは、勉強の条件だけで選ぶのではなく、自分が心から好きだと思える場所を選ぶのがいいと思います。なぜなら、そういう動機付けがいろいろな場面で後押ししてくれるからです」
- 「留学生が実家に電話する時は必ず寂しい時なので、電話代がもったいないと電話を切らないで下さい(笑)。そうなの?って話を聞いてあげて下さい」
- 「いろんな英語に触れるために、いろんな英語圏へ行ってみるといいです」



【生活】

(*^_^*)「体調を崩したことがあったけど、現地には現地の、日本のものよりよく効く薬があるので、健康面に心配があっても、心配しすぎることはない」

(>_<。o)「オーストラリアの物価は想像以上に高かった。例えばKitKatチョコは日本では90円だけど、現地では200円!値段の分、量がやたら多いので、女の子は絶対に太る(涙)。

(*^_^*)「公共の乗り物が日本みたいに正確でなく、±10分の誤差があるのはいつものことなので、時刻表を信用できず、交通手段に自転車を利用するようになったら5kg痩せることができた」

(>_<。o)「日本みたいな察しの文化ってのが向こうには全くなく、暗黙の了解もない。イヤなことはイヤだと言いたいことをちゃんとと言えるようになるのが、結構難しかった」

【留学の収穫、そして自分がどう変わったと思いますか?】

(*^_^*)「きついと思うことがあっても、へこたれないことが大事。自分の力を信じていれば必ず打開できることがわかった」

(*^_^*)「世界各国に友だちができ、今もメールで連絡を取り合って仲よし。視野が広がり、それが人生の財産となった」

(>_<。o)「日本にいる家族のありがたみを実感し、帰国後初めて食べた母の料理に陰で涙した」

(*^_^*)「漠然としていた夢が具体的にになり、自分がこれからやりたいことを明確にはっきり掴むことができたので、勉強を今までより頑張れるようになり、親にもあなたは変わったねと言われた」

(*^_^*)「帰国後、現地の友人と電話での英会話ができるようになっていた自分にびっくり。日本の英会話スクールでのレベルチェックも三段階あがった」



無事帰国した第一期生に続き、二期生も留学スタートを切っています。

現在、単位読み替え留学中の学生数実績(2008年10月現在)

●カリフォルニア州立大学サクラメント(米国)6名 ●ウェストミンスター大学(英国)6名 ●リムリック大学(アイルランド)2名 ●フリンダース大学(オーストラリア)5名 ●マッセイ大学(ニュージーランド)4名 ●ヨーク大学(カナダ)2名 計25名

続々と、世界に羽ばたく国際コミュニケーション学科の学生たち。教員達一同、様々な経験を経て遅く成長していく学生たちを頼もしく思っています。

新1年生を迎えたオリエンテーションキャンプ、先輩達が大活躍

学苑の研修施設、ハヶ岳山荘で、新1年生を迎えたオリエンテーションキャンプが行われました。今年は新1年生128名+先輩有志ボランティア+教員がこのイベントに参加、最も新1年生の関心と呼んだのは、留学体験をした先輩たちの経験談でした。まずは昨年アイルランド・リムリック大学に入学していた女子3年生Oさんが、自分の学科での成果(英語力)を、一年生&教員を前に発表。日本語よりも洗練された英語を喋る彼女に、みな目を見張る場面も。彼女は留学体験後、某英会話学校で“講師”

の職を得てしまったのだそう。留学という経験で、社会人に英語を教えるほどのスキルをつけてしまった彼女に、教員一同舌を巻いていました。もう一人、新一年生に大きな影響を与えたのが、2年生の男子学生Iくんの中国語。まだ留学もしていないというのに、留学経験があるかのような流暢さで“喋り”が披露されました。「現地に行かなくても努力一つでそこまでいけるんですね」。次にその人になるのは、国際コミュニケーション学科の新入生となったアナタ、です!



シェイクスピア英語劇、開催される



6/2、毎年恒例の人文学部主催英語劇イベントのシェイクスピア英語劇が開催されました。ロンドンよりインターナショナルシアターカンパニー劇団を招聘して今年の演目は『夏の夜の夢』。今年も、学生・教員・近隣の皆様などおよそ300人弱の方にお集り頂き、盛況のうちに無事終わることができました。「奥の深いシェイクスピア文学をぜひ、もっと日本の皆さんに知ってもらいたい、そんな気持ちで担当しています。学生だけでなく、近隣の皆様にも大学として貢献できれば、こんな嬉しいことはないですから!」とは、このイベントを毎年担当している本学科住本先生の談。来年の春もまた、別の演目で開催されます。一般の方も無料で入場できますので、御近隣の皆様、どうぞいらして下さいね。

石塚翔さん、中国語スピーチコンテストで3位入賞!



桜美林大学で行われた中国語スピーチコンテスト初級の部、名門大学からの出席者達がしのぎを削る中、2年生の石塚翔君が3位入賞を果たしました。実は石塚君、中国へ“行かず”に、語学力を会話に困らないレベルにまであげた人物。「自主サークル“ちゃいーにーず倶楽部”に参加したり、ランゲージラウンジに用意された語学教材をフル活用。彼の今回の結果は、学科で用意したツールを最大限に有効活用するという積極的な努力を続けられ、日本人が最も弱い“他言語でのプレゼンテーション(喋り)”も、国内で確実に身につけられることを表していると思います」と中国語の担当教員も大喜び。無駄なコストをかけずに自分のスキルをアップさせていって欲しい、教員の願いにのってくれる学生達は、今日も語学学習教材がずらりと揃った教室で、楽しみながら仲間たちと切磋琢磨しています。

中国語学習中の院生、いざ北京へ



7/1には、桜美林大学孔子学院主催の全日本青少年中国語カラオケ大会(日本地区の最終予選)で、大学院生の佐藤洋一君が見事入賞・予選通過し、8/19~24まで北京で行われる世界大会決勝戦への出場を決めました。「今回挑戦した分野は“歌”だったので、ただでさえ自分の気持ちや感情を表現

することが難しい外国語で、更に一段ハードルの高いチャレンジだったと思います。自分がくじけそうになったときにいつもそばで励ましてくれる先生・友達の大切さを改めて実感しました。本当に“ちゃいーにーず倶楽部”の部員に出会えてよかったと思っています」と佐藤君。活躍が目立つ中国語学習組。近代発展が目覚ましい中国に呼応するように、本学科の学生達の活躍は続いています。

NHK番組で明星サマースクールの模様が放映されました

現役学生が自ら作った手作りの教材で、近隣の小中学生らに無料で英語を教えるという、本学科の名物イベントともなった“サマースクール”。海外の様々な国からサマースクールのためにやってきてくれるボランティアの数も年々増え、学生達にとっては国際交流と英語教育の勉強ができるチャンス、そして御近隣の子ども達にとっては、年上のお兄ちゃんお姉ちゃんそして外国人と英語が無料で学べるチャンスとあって、年々規

模が大きくなっています。そして今年はついに、NHKの取材が入りました。NHK総合テレビ、「こんにちは6けん」で、その模様が放映、もしかすると御覧になられた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。来年も、サマースクール、やります。継続的に参加してくれる子ども達も多いので、定員を超えないうちに、希望者は早めに学科に申し込みをして下さいね。





●池本和夫 中国語

もともと東京都庁の職員だった先生は、1972年25歳の年、国が募集していた青年代表団で初めて中国の大地を踏んだ。当時の中国は監視が厳しく、今の北朝鮮のような雰囲気。「それはそれは緊張しましたよ」。それがきっかけとなって、語学留学をしよう一念発起、シンガポールと台湾に渡る。なんで行きたかったかと言えば「当時行きにくかったから(笑)。本当にいろんなことを学びました」。日本に帰国したのは30歳目前。せっかく習得したことを生かしたいというのが、教職の道に入ったきっかけだった。

「私が目指しているのは、“萎縮しない”授業。“使える”中国語を育てるのが目標です。木を見て森を見ずということがないように、発音が多少不正確でも大筋で相手に意味が伝わればそれでよしとしています。大学の授業は次のステップに受験が控えていないというのが利点。だから小さなミスにびくびくしないよう、学生に自信をつけさせてあげるのが、私の役目です」。

同時に植物観察を趣味としている池本先生は、中国での植林フィールドワークを担当、地球環境への地道な貢献に学生らと共に挑戦している。



●笠原順路 英文学

「ボクはね、なんでもすぐ役立つものばかりが学生時代に勉強しなければならないこととは決して思えない。即効性じゃなく、じわじわと後になって役立つ、そんな内容を意識しながら授業をやっています」。そういう先生の専門分野は英文学のロマン派の詩。「これは言語芸術なんです。詩を読む側にも書き手と同じくらいの“感性”や“情緒”が備わっていないと、表面的な字面の奥にある作者の“感性”を理解することはできない。作品を味わうってことは、心の豊かさそのものが問われることなんです」。

高校生の時、ヘルマンヘッセに感銘し、以来文学の道に入り、そこから原文で作品を読むようになったという先生は、詩は心を広げるツールと言って憚らない。「例えば、TVの広告キャッチコピーの一文でさえ、裏の裏まで深く味わえるかどうか。ボクの授業を受けてくれば、それができるようになります」。学生時代、特にはっきりした目的意識があったわけはないから、今の学生さん達の“流れに任せて人生を選択する”方式もとてもよく理解できるという先生は、現在、国際コミュニケーション学科の主任を務めている。

学科の愉快的仲間たち【教員編】

教養深く、生徒思いで、個性的な、本学科の教員たち。授業の中だけではなくなかなか触れられないその素顔を、今号から4回に渡ってお伝えします。(もっと詳しい記事が見たい方は、明星大学の学科ホームページを御覧下さい)



●菊地滋夫 人類学

勉強嫌いの夜行性ニゲン。そんな先生を、19世紀の英国の人類学者フレーザーの“金枝篇”という呪術の本が変えた。大学院生になった先生はリュックを背負ってケニアに二月の旅に出た。現地の人と生活をするうちに、彼らが持つ素直な希望とパワーの中に、ある種の豊かさを感じるようになった。「モノは日本のようにはないけれど、彼らが持つ想像力は我々とは比較にならない。彼らの世界観は、我々の近現代のやせ細った世界観をぶち壊してくれるんです」。そして“アフリカの憑依霊研究”という分野に入って行った先生。「ボクの学問はいわゆる実用知識ではないのですが、アフリカのおおらかな世界観に触れることで、“人間観を広げる”ことができる。もし今の自分の状況が窒息しうさだと感じているなら、ぜひボクの授業を受けてみて欲しいです」。

今年もタンザニアのザンジバル島へフィールドワークを実現させた先生は、ちょっと個性的だけれど豊かな奥行きがある世界を学生らに伝え続けている。



●津久井喜子 英文学

1ドル360円時代、ウーマンリブの風を自ら巻き起こすように、大学を卒業したの先生は米国へ渡った。「当時はインターネットなんてありませんから、全部手紙作戦。十数大学に手紙を送り、授業料全額免除での入学を頼み込みました」。人がやることができることは自分にもできるはずという挑戦が、先生を支えた。「せっかく米国に来たのだからと現地の日本人とは接触せず、たまに鏡を見て自分のアジア人顔にこの人誰だっけ?と思ったくらいでした(笑)」。

ストイックに昼夜を問わず勉学に邁進し続けた先生は、米国の大学で博士号を取得、そのまま、現地の大学で助教授のポストについた。そこで出逢ったのが、“原爆文学”というジャンル。「原爆というのはいわば人間にとって究極の惨事。そこから生み出される文学は、人間の根源的な何かを照らし出している気がして、私はそれに賭けようと思ったんです」。そして米国在住30年。

死ぬ時にあま生きて良かったと思える時間を過ごしたいという先生は、その情熱的な背中が学生達に何かを問いかけている。

Wanted

学生編集スタッフ募集中!

将来マスコミの仕事をしたい人、またはイラストなどで自己表現をしたい人、記事を書きたい人など常時募集中。企画段階から実際に形にしていくなかで、全てを自分で体験できるので、とてもやりがいがありますよ。積極的な参加をお待ちしています。

これは是非載せて欲しい!の記事&情報大募集

“GRAZIE”は、学生のみさんと作っていくメディアです。より充実した内容にいくために、どんな些細なことでもネタをお待ちしています。

〔応募先〕〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1明星大学国際コミュニケーション学科
Tel 042-591-5329またはinfo-com@eleal.meisei-u.ac.jpまで

「編集スタッフの眩き」

自分のできなかった事ができるようになるのって本当に楽しい。学科からの留学経験者の数は2009年に100名を突破する。そんなに沢山の学生さんが自己成長の快感を味わっているのかと思うと、羨望しきり(笑)。